
 原著論文

 他文化に対する「排他的態度」をめぐる
 論理的考察

—その不可避性と克服について—

星川啓慈

抄録

現代においては、「異なる文化の共生」や「他文化に対する寛容な態度」が推奨され、これらに積極的に関与すべきことが強調されている。しかし、「他文化に対して寛容であるべきだ」とはいつでも、現実問題としてそれが難しい場合もある。「寛容／非寛容」という概念と密接な関係にある概念、これをさらに先鋭的に表現した概念は「排他性／非排他性」である。本論文では「排他主義」を議論の俎上に載せ、他文化に対する人間の排他的態度について論理的に吟味し、「他文化に対する排他的態度は、人間に内在している自然なものであること」を論証する。その後、さらに歩みを進めて、「排他性」には「健全な排他性」と「不健全な排他性」があることを示し、「多文化共生」をさらに推し進めることにとって本質的な事柄は（両者を明確に意識しながら）前者を保持したまま後者を克服することであることを論じる。

 Key words : 文化, 他文化, 多文化共生, 寛容／非寛容, 排他性／排他主義

こころと文化 18(2) : 203-211, 2019

序言

現在、異なる文化の共生や他文化に対する寛容な態度の重要性が頻繁に強調され、「われわれはこうした事柄に積極的に関与しなければならない」という見解が流布している。筆者もそのことに異論はない。しかし、「他文化に対して寛容であるべきだ」とはいつでも、現実問題としてそれが難しい場合もあることは、これらの問題に取り組んだ者であれば誰もが痛感しているであろう。人は自分が属していない文化に対してそれほど容易に寛容になれるのであろうか。

「寛容／非寛容」という概念と密接な関係にある概念、これをさらに先鋭的に表現した概念は「排他性／非排他性」である。以下では「排他性

／排他主義」を議論の俎上に載せ、他文化に対する人間の排他的態度について吟味する。方法論的には、原則的に心理学的アプローチをとらずに、論理的アプローチを採用し、「他文化に対する排他的態度は人間に深く内在していること／人間に不可避的に備わっていること」を論証する。その後、さらに歩みを進めて、(1)「排他性」を「健全な排他性」と「不健全な排他性」に区別することを提案し、(2)「多文化共生」をさらに推し進めることにとって本質的な事柄は（両者を明確に意識しながら）前者を保持したまま後者を克服することであることを論じる。竹沢泰子も述べているように、「多文化共生は、文化間の対等関係を促す概念というより、〈異なる文化〉を受け入れ尊重するためのスローガンになっているらしいがある^{4)註4)}」。「多文化共生」という言葉がたんなるスローガンにならないためには、「排他性」をめぐる冷静な（時には冷徹な）理論的考察も必要である。

 受付日 2018.4.18 / 受理日 2019.3.22
 Keiji Hoshikawa : 大正大学
 〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

なお、「文化」には種々の要素・側面があり、これは大きくて複雑な複合的体系をなしている。しかしながら、本論文では、文化のすべての要素・側面を議論の対象とするのではなく、(論理的に議論を展開するために)文化の中でも言語化できる側面を重視したい。すなわち、文化を言語化可能な見解や信念の体系として捉えて、議論を展開する。

I. 文化的排他主義批判の非普遍性

くり返しになるが、現在、異なる文化の共生や文化の多元性、ならびに、他文化に対する寛容さや非排他的態度が、一般的に推奨されている。しかしながら、ここで翻って、「文化的な排他的態度は本当に非難・放擲されるべきなのか」と問うてみたい。なぜならば、他文化に対する排他的態度は、見方によっては、人のアイデンティティや人生観や根源的世界観の構成に關与する「文化」を担う、人間の自然な(場合によっては正当な)態度である、ともいえるからだ^{1,2,5)}。

また、「人は現代に生きているならば、他文化に対して排他的であってはならない」という見解は広く受け入れられているが、この考え方にまったく問題はないのだろうか。議論を精確にするために、価値に関わる部分がないように、この見解を「ある人が現代に生き、かつ、社会に適応しているのであれば、その人は他文化に対して排他的ではない」と書き換えよう。そうすると、その対偶は「ある人が他文化に対して排他的であるならば、その人は現代に生きていない、あるいは、社会に適応していない」となる。この対偶に対する反例は簡単にあげることができる。つまり、実際に「現代に生きて、社会に適応していて、他文化に対して排他的態度をとる人々」は存在しているのである。例えば、日本でも問題になっているヘイト・スピーチをする人々がその例となろう。ゆえに、「ある人が現代に生き、かつ、社会に適応しているのであれば、その人は他文化に対して排他的でない」という命題は偽となる。ここから、

「人は現代に生きているならば、他文化に対して排他的であってはならない」という見解は、必ずしも正しい主張ではないことになる。

II. 「排他主義」の定義と説明

本節では、他文化に対する「排他的態度」は、自分の文化にコミットしていこうとする人間に生ずる「自然な態度」であることを論証したい。これを不当に非難する人々は、人間に内在する「自然な態度」について間違った見解を懐いている、といえるかもしれないのである。もちろん、他文化に対してまったく排他的態度をもたない人々もいるかもしれない。しかしながら、以下では、「多くの人間には他文化に対する何らかの排他的態度がむしろ必要である」と考えて、議論を展開したい。

以下において、他文化に対する「排他主義」や「排他的態度」について論じるわけだが、「排他主義/排他主義者」という語の解釈は論者によって微妙に異なる。筆者は「排他的態度」と「排他主義」を区別して、「排他主義者は必ず排他的態度をもっているが、排他的態度をもっている人が必ずしも排他主義者になるわけではない」と考えている。すなわち、ある文化に対して排他的態度をもっていたとしても、それを具体的な排他的活動に移さない人々も多いということである。しかしながら、本論文では、「排他主義」を(具体的な行動に移さなくとも)「排他的態度をもつこと」として広く考えたい。すなわち、人間の内面に潜む本来的なものとして排他主義を捉えたい。

1. 本節の議論とA・ブランティンガの議論との関係

本節での議論は、A・ブランティンガ(1932-)によるところが大きい。そこで、まず彼について紹介し、その後、本論文での議論と彼の議論との相違点について述べ、本論文の意義を確認したい。

ブランティンガはアメリカの分析哲学者であり、主として、論理学・認識論・宗教哲学などの分野で活躍している。熱烈なカルヴィン派のキリスト

教信者である彼は、従来の宗教哲学のやり方に「革命」を起こしたといってもよい。彼はその斬新な手法——筆者がとくに注目しているのは論理学／様相論理学の知見を古典的な神学の問題に適用する手法である——を駆使して、種々の神学上の問題に立ち向かっているのだ。プランティンガのことを、W・クレイグは「存命のキリスト教哲学者のなかで最も偉大な哲学者」（『合理的信仰』1994年）とみなし、タイム誌は「アメリカで最先端をいく、神の存在を議論している正統的プロテスタントの哲学者」（2013年）と述べている^{註1)}。

本節は、宗教の排他性を擁護するために執筆された、プランティンガの論文「多元主義——宗教的排他主義の擁護^{2,註6)}」に見られる手法および排他性をめぐる議論（わずか176～179頁の4頁だが）を「多文化共生」の場合に適用する、という試みである。ここで、(1) プランティンガの論文と本論文との関係、および、(2) 彼の目論見と筆者の目論見との相違を明確にしておきたい。

(1) キリスト教信者としてのプランティンガの一連の議論は、上記の論文のサブタイトルが明示するように、「宗教的排他主義」の擁護に傾注しており、「人間は必然的に他文化に対して排他的なものである」とは述べていない。しかし、彼の宗教的排他性の擁護をめぐる議論は、宗教の信者という枠組みを超えて、人間一般に内在する文化上の排他的傾向に適用することが可能である。この点において、筆者の議論はプランティンガの議論の延長線上にある。

(2) プランティンガは、宗教における排他性の存在を認め、それを「擁護」している。だが、筆者は、人間の排他性（後述する「不健全な排他性」）は擁護すべきものではなく、その存在を凝視し「克服」しなければならない、と思っている。この点において、排他性をめぐって、筆者の議論はプランティンガの議論とは対立関係にある。しかしながら、このとき、「排他性」の意味が問題となる。彼は排他性の場合分けをしていないが、筆者はこれを「健全な排他性」と「不健全な排他性」の2種類に分類する（第4節）。「排他

性」を大きな視点から捉えれば、種々のかたちで存在している。例えば、人体が持つ免疫のシステムは「排他のシステム」であるといってもよい。また、「排他的経済水域」は一国を護るためのものである。これらは人体や国土を護るために必要なものであり、排除する対象に蔑視・嫌悪などを伴わない。つまり、これらは健全な排他性である。人間の場合でも、自分のアイデンティティや世界観や文化を維持していくための排他性は必要かつ健全なものである。問題なのは、排除する対象に蔑視・嫌悪などを伴う不健全な排他性である。筆者は、多文化共生のために排他性のあらゆる側面を否定すべきだ、とは考えない。そうではなく、不健全な排他性は克服すべきものだが、健全な排他性は保持すべきである、と考える。

以上の論述から、本節における排他性／排他主義肯定の論証方法はたしかにプランティンガのものを縮約・換骨奪胎した形で利用するが、2人の論文の主旨はまったく異なっていることを確認しておきたい。

2. 排他主義／排他主義者の仮説的定義

ここでは、不健全な排他性と健全な排他性の区別はいったん（第3節まで）括弧でくくり、「排他主義」を次のように定義してみよう。また、以下の(1)(2)は、多くの一般の人々にも妥当するであろう。この事実はきわめて重要で、(1)(2)を認めた人々は定義上「排他主義者」であることになる。

- (1) 排他主義者は「自分が属している文化で継承されている1つ以上の見解や信念（以下「見解」と略記）は、真である」と信じている。
- (2) 排他主義者は「自分が肯定する自らの文化における見解と両立不可能な他文化の見解は、偽である」と信じている。（cf. 梅津, pp. 107-108）

(1) については、問題なく、ほとんどの人々に認

められるだろう。(2)についてはどうであろうか。一見リベラルで寛容な多くの人々は、自分の信ずる見解と両立不可能な見解でも「偽である」とまでは断言しないかもしれない。そうした人々は、自分が肯定する見解と対立する見解の正否について尋ねられたら、不可知論的に「わからない」とか、「自分の見解とは異なるが、他者の見解を尊重する」などと答えることが多いと予想できる。これは、無用な対立を避けるための人間の智慧であり、一般的な傾向だといえるであろう。しかしながら、そうした人々でも、心底では(2)も認めるのではなかろうか。人間というものは、本音のところでは、自分が肯定する見解と両立しない見解を肯定することは基本的にあまりないと思われる。なぜならば、人間は一般的に、論理学を持ち出さなくとも、論理的矛盾を直感的に嫌うからだ。

そうだとすれば、人々は、意識的な場合から無意識的な場合まで程度の差はあれ、「排他主義者」になる可能性が高い。しかしながら、これはごく「自然な」ことであり、非難されるべきことではない。むしろ、節操なく、自分の文化に流布している見解にみられる見解と対立関係にある他文化の見解も認めることこそが、不自然なことではないか。

さらに、(1)(2)の排他主義者の定義に加えて、議論の前提として、排他主義者は次の3つの条件(「条件C」)をも満たしているものとする——とりわけ、(3)が重要である。

条件C:

- (1) 排他主義者は、他文化について(程度の差はあれ)知識を有していること。
- (2) 排他主義者は、「他文化には(程度の差はあれ)現実味がある」と感じていること。
- (3) 排他主義者は、「排他主義者の文化を否定する他文化に属している人々に、排他主義者の文化の現実味を確信させる議論はない」ことを知ったうえで、自分の文化の正当性を信じていること。(cf. Plantinga, p. 176)

(1)については問題ないだろう。なぜならば、知らない文化を嫌悪することは意味をなさないからだ。ある文化は、それを知っていて初めて、嫌悪することができる。(2)についていえば、他文化がもっている現実味を認めることなくそれを嫌悪することもあるだろうが、さらに深刻なのは、それがあ程度の現実味をもつことを認識した場合である。その理由は、その現実味が自分の文化にとって一種の脅威・恐怖となるからだ。例えば、ユダヤ=キリスト教文化に属している有神論者は、無神論的唯物論などの無神論の文化を拒否すると推測できる。(3)についていえば、これは、自分の文化の現実味を納得させる説明は最終的にはできないと知りつつも、自分の文化を信奉するということである。卑近な例をあげるならば、日本人でも、日本文化を愛しながらも、「日本文化の深層は外国人に説明しても理解できない」と思っている人は多いであろう。極端な例をあげるならば、イスラム過激主義者が「敵対している欧米人に自分たちが感じている過激主義の素晴らしさの現実味は説明しても分からない」と思いつつ、イスラム過激主義を信奉していても、不思議はないであろう。それゆえ、多くの人々にとって「条件C」も納得がいくであろう。

3. 「判断の差し控え」という態度の妥当性

ここで、以下のようなケースを想定してみよう。S₁とS₂という2人の排他主義者が存在し、それぞれの信奉する「見解P」と「見解-P」(見解Pの否定)とが対立(場合によっては衝突)している、という状況である。すなわち、次のような状況である。

- (1) S₁は「Pは真である」と信じ、かつ「-Pは偽である」と信じている。
- (2) S₂は「-Pは真である」と信じ、かつ「Pは偽である」と信じている。(cf. 梅津, p. 109)

そして、この状況において、便宜的に、次の3

つの可能性を想定したい。(1) S_1 と S_2 が、ともに、他方に対して排他的態度を貫き、排他的関係が成立する可能性。(2) S_1 と S_2 が、ともに、他方の見解を容認し、対立関係が解消される可能性。(3) S_1 と S_2 が、ともに、おのおのが懐いているPと \neg Pについて判断を差し控える可能性。

ところで、さきに、自分の見解と両立不可能な見解を「偽である」とまでは断言せず、不可知論的に「わからない」とか、「自分の見解とは異なるが、他者の見解を尊重する」などと答える可能性を示唆しておいた。これは、形式的に、(3)に近い。(1)と(2)については議論する必要はない。問題をはらんでいるのは(3)である。

そこで、排他主義者同士とはいえ、何らかの理由——例えば、2人の間に生じる対立や衝突を回避するためとか、相手に対する寛容さを見せるためとか——により、「 S_1 と S_2 が、ともに、おのおのが懐いているPと \neg Pについて判断を差し控える」という場合を考えてみよう。いうなれば、「排他主義者が排他主義的態度を一時的に保留する」ということである。この場合、排他主義者の仮説的定義の一部としての「条件C」を組み込んで、次のような「方針G」を立てることができる。

方針G：

「条件C」のもとにおける正しい方針は、自分を不快にさせる見解（自分のものと対立している見解）を信じることを差し控えることであり、かつ、その見解の否定（自分自身が信じている見解）を信じることも差し控えることである。

これをプランティンガ自身の言葉で書き換えると、次のようになる。

方針G'：

もし、Sが「他者がPを信じていない」ことを知っており、かつ「自分はPについて、〈条件C〉のもとにある」ことを知っているとしたら、SはPを信じることを差し控えるべき

である。(see Plantinga, p. 178)

この「方針G/G'」（以下「方針G'」）を簡略化していえば、「〈条件C〉のもとでは、対立する相手が懐いている見解はおろか、自分が懐いている見解も信じない／保留する」ということである。問題は、この「判断の差し控え」「自分が懐く見解を信じることの差し控え」という態度が正当化されるか否かである。結論から言えば、答えは「否」である。

その理由は、以下ようになる。(1) まず、一般的に現代社会においては、いかなる状況であれ、「自分が信じている見解・信念・信条を信じてはいけない」ことを容認するような人はいないからである。(2) さらに、こちらが重要なのだが、「方針G'」を肯定する者は、「条件C」と論理的整合性を保てないからである。「条件C」には、(3)として、「排他主義者は、〈排他主義者の文化を否定する他文化に属している人々に、排他主義者の文化の現実味を確信させる議論はない〉ことを知ったうえで、自分の文化の正当性を信じていること」がある。「方針G'」を肯定する者は、自分が「条件C」のもとにあることを認識している。すなわち、「そうした〈方針G'〉を容認しない多くの人々に〈方針G'〉の現実味／正しさを確信させる説得的議論を見出す可能性はない」こと——いいかえると、「判断の差し控えなどは無意味である」という人に対して、判断を差し控えることの有用性を説得することはできないこと——を認識しているのである。そうだとすれば、「方針G'」を肯定する者でも、「条件C」の(3)から、自己遡及的に、やはり排他主義者にならざるをえないのである。

こうしたことから、結果的に、「 S_1 と S_2 が、ともに、おのおのが懐いているPと \neg Pについて判断を差し控える」ことは意味をなさなくなる^{注2)}。つまり、 S_1 と S_2 の両者はそれぞれの見解（Pと \neg P）を懐きつづけてもよいことになる。むしろ、そうすべきなのだ。いいかえれば、「条件C」——これは多くの人々が受け入れるものであ

る——を認めるならば、必然的に、自分が受け入れられない見解に対して排他的態度をとることは、否定されないことになるのである。

Ⅲ. 個々の見解と全体としての文化

第2節では、有神論と無神論の場合のように、ある見解（例えば「神は存在する」）およびそれを否定する見解（例えば「神は存在しない」）が明確な対立関係を形成する場合について考察した。しかしながら、種々の見解や信念の体系としての2つの文化に包含される諸見解がすべて互いに対立するというような事例は、現実には存在しない。

それでも、第2節までの議論は、諸見解や諸信念の体系としての2つの文化の場合にも応用できる。その理由は以下のようになる。

まず、対立する2つの命題の「対立」は、ある命題の肯定形と否定形という形をとらなくてもよい。例えば、「民主主義が最善の政治形態である」の否定的見解は、この命題の論理学的否定である「民主主義が最善の政治形態ではない」ではなく、「独裁主義が最善の政治形態である」でもよい。つまり、民主主義と独裁主義とが対立関係を形成しているとみなすことに、不都合はない。さらにいえば、民主主義に賛成する陣営の人々は独裁主義に対して、独裁主義に賛成する陣営の人々は民主主義に対して、それぞれ全体として排他的態度をとっていると想定しても、支障はないであろう。

つぎに、ある人が他文化に対して排他的態度をとるには、当然のことながら、それが「自分の文化ではない」という条件がある。そして、ある見解 (P) およびそれを否定する見解 ($\neg P$) をめぐる議論は、「自分が属する文化」(文化Q) と「自分が属さない文化」(文化 $\neg Q$) の場合にも応用できる^{註3)}。例えば、政治形態を1つの文化とみなせば、民主主義に賛成する人々と独裁主義に賛成する人々との場合は（論理学的否定ではないとしても）この例である。また、他文化に対して排

他的な態度をとる人々の場合、「他文化のこの点が嫌い、あの点が嫌い」というよりも、「全体として嫌い」という場合が多いと推測できる。具体的にいえば、キリスト教の有神論者は無神論的唯物主義そのものを嫌って排他的態度をとり、ヘイト・スピーチをしている人々は罵倒している外国文化を一括して排除しようとしている可能性が高いのである^{3註7)}。

以上のように、第2節までの議論を拡大解釈すれば、ある人が「自分の〈文化Q〉は真である」と信じ、かつ「自分にとっての異文化である〈文化 $\neg Q$ 〉は偽である」と信じて、「文化 $\neg Q$ 」に対して排他的な態度をとっているとしても、それを具体的な行動で示さない限りは、その態度は自然なものとして論理的には許容されることになるのである。

これまでの議論から導き出される知見は、次のようなものである。

- (1) 人々が属している文化の中には言語で述べられる見解や信念がある。他文化の中にそれと対立する見解や信念があれば（とりわけ、それらが自分の大切な人生観・世界観・アイデンティティなどと相容れないものであれば）、人々はそれらに対して排他的態度をとることは自然なことである。その排他的態度が実際の行動に移されなければ、その態度自体は非倫理的なものとして頭から非難されるべきものではない。
- (2) 対立する2つの見解の場合の議論は、アナログカルに、「自分が属する文化」と「自分が属さない文化」の場合の議論に適用できる。そうすると、人々にみられる他文化全体に対する排他的態度は、自然な態度であり、それが実際の行動に移されなければ、その態度自体は非倫理的なものとして頭から非難されるべきものではない。

IV. 「健全な排他性」の保持と 「不健全な排他性」の克服

第2節と第3節の議論は「他文化に対して排他主義的態度をとること自体は、人間にある自然な(正当な)傾向である」ことの論証である。しかしながら、もはや多文化共生社会に生きることを余儀なくされているわれわれは、この事実を認識することのみに終わってはならない。なぜなら、やはり、実践的にこの事実を乗り越えていくことが、要請されているからである。また、プラグマティックに響くが、全体としてこの方向で進むほうが人類の未来のためには得策であろう。いいかえれば、世界各地において文化の相違が要因(の1つ)となって多種多様な「対立」が生じている状況で、それらが質量ともに増大していくことは人類にとって脅威である。なんとしてもそれを食い止めなければならない。

ここで、これまでの議論を踏まえると、他文化に対する排他主義をめぐって、図式的に3つの方向が想定できる。

- (1) 積極的排他主義——人間の内部に巣くう、他文化に対する排他的態度を容認し、おのおのの文化に属する人々が、自身の文化の正当性を主張し、他文化に対して排他的行動をとる方向。
- (2) 消極的排他主義／消極的非排他主義——人間の内部に巣くう、他文化に対する排他的態度を認識しながらも、自制して、それを他文化の具体的な排他的行動に結びつけない方向。
- (3) 積極的非排他主義——人間の内部に巣くう、他文化に対する排他的態度を認識しつつ、それを乗り越えて、おのおのの文化に属する人々が、積極的に他文化を受け入れる方向。

当然、(3)が目指されるべきである。だが、現

実は(1)(2)の方向をとる人々も多いことは想像に難くない。(1)の場合には、世界が立ち行かなくなるだろう。だが、(2)の場合であれば、何とか世界は立ち行くだらう。しかしながら、さらに歩を進めて、(3)の方向をとるためには、人間に内在する他文化に対する根源的な排他的傾向を、今一度、凝視すべきであろう。その理由は、「多文化共生」や「他文化に対する寛容な態度」を世界の人々に広くもたらすには、まず、人間に深く内在する他文化に対する根源的な排他的傾向を深く認識・自覚することから始めなければならない、と思うからである。こうした認識・自覚なしに、他文化に対する寛容な態度を人々に求めるのは、あまりにも楽天的といわざるをえない。

ここから、これまでの議論をすべて踏まえたいえで、第2節第1項で言及した「健全な排他性」と「不健全な排他性」について論じ、さらに議論を深めたい。上で、「人間に深く内在する他文化に対する根源的な排他的傾向」と述べたが、人類が克服すべきなのは、蔑視や嫌悪などを伴う不健全な排他性である。

もちろん、「健全な排他性と不健全な排他性をいかに区別するのか」という問題がある。これについては、2つの排他性をクリアカットに切り分けることは困難かもしれないが、仮説的に、次のように考えたい。(1)まず、人間の排他性の基層レベルには、自分の人生観や世界観やアイデンティティや自分の文化を護り、それらにエネルギーを付与する健全な排他性が存在する。(2)つぎに、その上層にある排他性のレベルには、他文化に対する蔑視や嫌悪などを伴う不健全な排他性が存在する。

不健全な排他性は人類が克服すべきものであることは自明であり、これについて議論する必要はない。健全な排他性についてのみ述べると、自分の人生観やアイデンティティや世界観や文化を維持してゆくためには、「自分や自分の世界観や自分の文化と、他者(=異文化に属する人々)や他者の世界観や他者の文化との、相違・異質性」が存在しなければならない。このためには、何らか

の「排他性」が、すなわち、自分のアイデンティティや人生観や世界観や文化に傾注しこれらを持し充実させていくための排他性が必要となる。これまで多くの論者が述べているように、「他者」あつての「自己」なのである。私見では、両者の相違・異質性は、排他性があつて初めてもたらされるものなのだ。これがなければ、自分のアイデンティティや人生観や世界観や文化を維持していくことはできないだろう——「免疫のシステム」や「排他的経済水域」のことも想起してほしい。

さらに「健全な排他性」についていえば、常識的な見解をもつ人々から「それでも、排他性は相違・異質性とは異なるものである」と批判されるかもしれない。しかしながら、上記のように排他性を重層的に理解すると、「排他性」という言葉で一括されていた曖昧な概念を新たな観点から見直すことができる、という利点がある。すなわち、多文化共生を進めていくうえで、「乗り越えるべき排他性の性格」が従来よりも明確になるのだ。

ここで、「多文化共生」にとって大切なことは、ある文化に所属する自分に健全な排他性があつてよいのと同様に、異文化に属する他者にも健全な排他性があつてもよいことを承認することである。複数の異なる文化に属する人々が、互いにこのことを承認し合い、不健全な排他性のみを排除するように意識的に努力するようになれば、多文化共生はさらに進展するに違いない。

そのことを踏まえたうえで、現実問題として考えると、不健全な排他性の排除というよりも、不用意に不健全な排他性を賦活しないことが、喫緊の課題である。

結 語

「排他的経済水域」などという言葉は例外とすれば、現代社会においては、一般に「排他」「排他性」「排他主義」「排他的態度」という言葉は最初から否定的な含意をもっており、これらの言葉は頭から否定されるというのが実情である。しか

し、これでは「思考停止」といわねばならない。「多文化共生」を深く考えるには、また、これをさらに進展させていくためには、他文化に対する寛容な態度を人々に求めたり、多文化共生を推奨したりすることに加えて、今一度、「排他性」をめぐる根源からの冷静な（場合によっては冷徹な）議論が必要であろう。

謝辞：本論文の執筆に際しては、高橋秀裕氏（大正大学・教授）と本山一博氏（玉光神社・宮司）からご助言をいただいた。心から感謝申し上げる。

注1) https://en.wikipedia.org/wiki/Alvin_Plantinga (2018年11月4日閲覧)

注2) ただし、方針G/G'を持たない者同士が争うことがあつたとしても、その方針を持つ者同士がこの方針の下で争わずに済むのなら意味がある、といえなくもない。しかしながら、本論文の趣旨からは、このケースは末節的なケースである。

注3) 本山一博氏のご教示にもとづいて、補足しておきたい。個々の命題 (p1, p2, …) ではなく、文化Qを命題の集合Pとその命題間の（代数的な）構造Nとみなせば、 $Q=(P, N)$ となる。そして、その文化を信奉する人々の集合をQBとする。ここで、やや強い仮定だが、任意の異なる文化 Q_k と Q_l について、集合としての Q_kB と Q_lB には共有部分はないとする。つまり、ある人が文化 Q_k を信奉する場合には、その人は Q_l を信奉しないということである。このように、個々の命題を離れて、文化を命題と構造の集合とみなし、文化とそれを信奉する人々の集合を同一視すれば、命題に基づいた議論と文化全体の議論は同じ構図で議論することができる。民主主義と独裁主義をそれぞれ1つの文化とみなせば、前者 Q_m のなかには後者 Q_d と異なる命題が含まれ、まったく同じ命題がその中であつたとしても（むしろ同じ命題の方が多いであろう）、その命題間の構造（命題間の優先順位など）は違うので、 Q_m は Q_d と全体として異なることになる。

注4) この論文では、日本語としての「多文化共生」という言葉の特殊性、「多文化主義」と「多文化共生」との相違、日本における多文化共生の問題点などの重要事項について、包括的な視点から論じられている。

注5) 栗本英世は「多文化共生という概念は、その主体とは文化であることを前提としている」とし、「共に生きるべきなのは、文化ではなく、文化の担い手である人間ではないのか、共生の問題を文化の問題に還元することは、それが生身の個々の人間の生き方にかかわることを見えにくくする」と述

べている。人間に内在する排他的態度について論じる本論文は、栗本とともに、「多文化共生を担うのは人間である」という立場から議論を展開している。

注6) また、プランティンガには“A defense of religious exclusivism” (1994) という論文がある。残念ながら、筆者はこの論文を入手できなかったが、梅津氏の論文の106-110頁にこの論文の紹介がある。そこでの解説やプランティンガの命題の定式化も参考にさせていただいた。

注7) 「人種」概念について種々の観点から批判的に考察した竹沢は、この論文において「人種概念の特徴の一つは、その排他的性格にあると考えている」と述べ、アメリカにおいては「人種概念は、近代化、植民地主義などとの深い関連で、より〈文明化〉された者、より〈進化〉した者と、〈野蛮〉な者、〈未開〉な者が19世紀後半から盛んに論じられる社会進化論の波にのって、時間軸における相違として理解され[た]」と論じている。全体論的に文化を捉えている本論文の文脈でいうと、「より文明化されより進化した者たち」と、「野蛮で未開な

者たち」がそれぞれの文化を担うとすれば、当然、前者は後者を全体として排他的に捉えるであろう(不健全な排他性)。この傾向は、本文であげた具体例をふくめて、現実において種々のかたちで広範にみられる。

【文献】

- 1) 栗本英世：日本の多文化共生の限界と可能性。未来共生学, 3: 69-88 (2016)^{注5)}。
- 2) Plantinga A: Pluralism: a defense of religious exclusivism. In *The Philosophical Challenge of Religious Diversity*. 1st ed., ed. by Quinn P and Meeker K, 172-192, Oxford University Press, Oxford (2000).
- 3) 竹沢泰子：「人種」—生物学的概念から排他的世界観へ。民俗学研究, 63(4): 430-450 (1999)^{注7)}。
- 4) 竹沢泰子：序—多文化共生の現状と課題。文化人類学, 74 (1): 86-95 (2009)^{注4)}。
- 5) 梅津光弘：倫理学的に見た宗教多元主義。(間瀬啓允, 稲垣久和編) 宗教多元主義の探究, 初版, 97-117, 大明堂, 東京 (1995)^{注6)}。

Some considerations on “exclusive attitude” against foreign cultures: Its inevitability and overcoming

Keiji Hoshikawa

Taisho University

Abstract

Though the phrases “coexistence of different cultures” and “liberal/tolerant attitude towards other cultures” have been well emphasized these days, it is sometimes very difficult to take such attitudes, as many people realize who have tackled these issues. The liberal/tolerant attitude has a close relationship with the “non-exclusive” attitude. So in this paper, I will discuss “exclusive/non-exclusive attitudes towards foreign cultures” from a logical point of view and demonstrate that the exclusive attitudes against foreign cultures are inevitable in human nature; they are deeply inherent in human beings. We should as a matter of course strive to overcome the dark attitudes. We have to, however, firstly recognize or stare at the facts seriously to realize a better state of coexistence of different cultures. The important point is to retain “essential exclusivity” which is essential for human beings and to remove “non-essential exclusivity” which hates or disdains foreign cultures.

Key words : culture, foreign culture, multicultural coexistence, liberal/non-liberal attitude, exclusivity/exclusivism